

## グレーサー病事始め

営業部顧問  
高橋 吉男

グレーサー病は古い豚病学第2版(1982年)によると「しばしば豚の呼吸器道に常在的に存在し、菌の増殖を容易ならしめるような要因が内外から侵入した場合に初めて発症するが多い」と記されていました。つまり、原因菌のヘモフィルス・パラスイス(Hps)はほとんどの豚の呼吸器に存在しますが、普段は問題を起こさないのて人によっては雑菌とみなされていたのです。例えば、トラックの輸送途中で雨に降られて豚がびしょ濡れで到着するなどの極端な状況で発症するというような、珍しいものでした。ただし、Hpsのない豚群にHpsが新たに侵入した時や、逆にHpsのない豚をHpsの常在する豚群に導入した時には重大な被害を与えます。

Hps不在の農場が無かった当時は問題にならず、新たにHps不在のSPF豚群が作成された際にSPF豚特有の問題と考えられてきました。

ところが近年、Hpsの常在する農場でグレーサー病が発症して苦労されている養豚場が少なからず見受けられるようになりました。

- 1) 豚の感受性が強くなったのでしょうか?
- 2) 衛生レベルが上がって他の病原菌に感染して死亡することが少なくなったのでしょうか?
- 3) PRRSやサーコウイルスなどの昔は無かったウイルスが関係しているのでしょうか?

はっきりとした理由は不明ですが、問題になっています。

1980年代中頃、日本の養豚業界でグレーサー病がほとんど知られていなかった頃のお話です。

その頃、グレーサー病で大変苦労しました。それを思い出して、グレーサー病について考えてみたいと思います。

当時は養豚の飼養規模が急速に拡大していました。それに伴い豚の育種改良をはじめ養豚施設・資材等の改良が急速に進んだ時代でした。

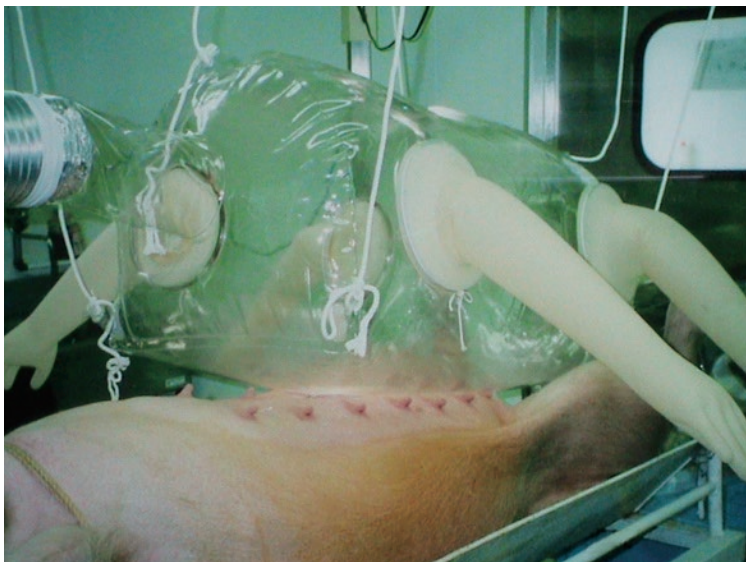
消費者は食品の安全性に注目するようになり、SPF養豚に対する関心が高まるにつれ、SPF種豚が求められ始めた頃でもありました。

初期のSPF豚は海外のSPF豚に関する文献をもとにした、いわば手探り状態でのスタートでした。豚舎設備や飼育管理、予防衛生技術等も旧来のもので様々な問題点があり、世代を重ねるごとに徐々に雑菌による汚染が進んでいました。

そのため、新たなSPFピラミッドを構築する動きが始まっていました。

80年代中頃、新たに専用のオペレーション施設と人工保育施設と共にSPFのGGP農場を新設しました。

オペレーション施設で分娩直前の一見健康な母豚から無菌的に子豚を摘出します。

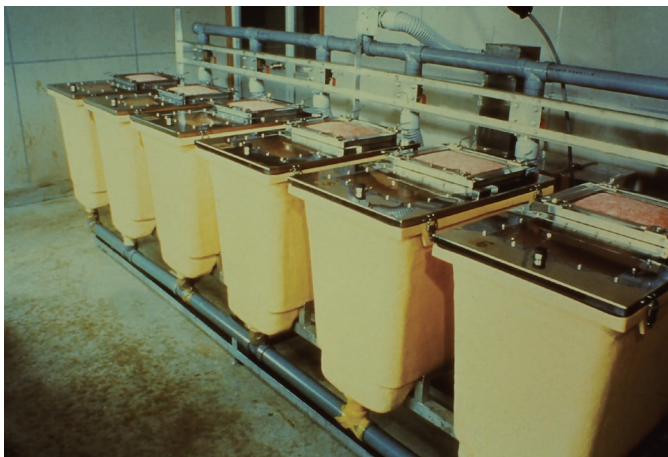


帝王切開用のバルーン

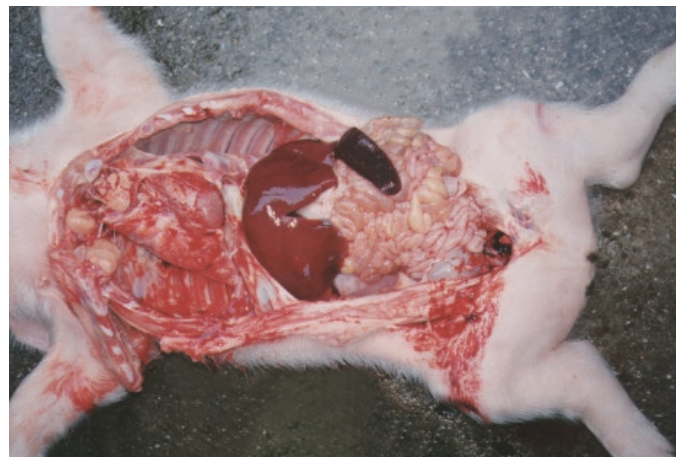
フィルターで滅菌された空気が常に送り込まれるので、膨らんで手袋が外に突き出ています。

バルーンの下は母豚の腹部の切開するところに接着します。外に突き出た手袋を中に押し込んで手術をします。

摘出した子豚は濾過滅菌された空気と無菌飼料を供給する人工保育施設で4週間無菌的に飼育します。  
 その後、保育箱から出された子豚は厳重に隔離された清潔な環境で育成され、常在菌は持っていても特定の病原菌を持たない状態で育成し、繁殖させて新しい系統のSPF豚群を作出しました。  
 そこまでは順調でした。  
 しかし、新たに作出された清浄度の高いSPF豚を在来の豚群に導入すると何の問題もなく順応する農場がある一方、中々上手く順応しない農場もあったのです。  
 最初は在来のSPF豚・GP農場に出荷しました。導入翌日、連絡がありました。「豚が全部元気なくかたまっとうずくまっている」と言うのです。慌てて、列車で数時間かけて農場へ出かけました。  
 確かに、全部の豚がぐったりとして横になっています。立たせようとすると、犬坐姿勢で座りこむものもいます。無理をして立たせることは出来ても、ほとんど歩けません。無理矢理に歩かせると足をつっ張って、やっとのことで歩くのは良いほうでした。安楽死をさせて、内臓を見てみましたが全く変化が見られません。  
 歩くのを嫌がるのですが、関節腔の中も変化はありません。菌を培養しても通常の培養では何も出てきません。さて何だろうと皆で首を傾げたものでした。この時は抗菌剤による治療で対応出来ました。  
 その頃、毎月100頭の種豚候補豚を東北から九州の農場に輸送していました。  
 長距離輸送を解消するため、九州にGP農場を新設しました。その後数年かけて九州に豚を出荷できるようになりました。  
 ここでまた、お客さんに出荷した豚で同じようなことが起きました。  
 抗菌剤を注射してから出荷したのですが導入後まもなく発症します。そのため、導入後しばらく抗菌剤を飼料添加しましたが、投薬をしている間は順調ですが、添加を止めると元気消失、歩行困難が始まりました。  
 有効な血中濃度がある間は発症(菌の増殖)を抑えていたのが、血中濃度が下がって発症したのだらうと思っています。  
 これではということで、誰か専任で事に当たらなければならないということとなり、当時最も自由(暇)だった私に白羽の矢が立ちました。  
 その頃私は東北で雄豚の管理と人工授精用の精液の作成、発送(自家用)をしていました。  
 精液を発送しなければならなかったので、月曜日の朝に採取、処理して精液を発送してから新幹線で東京に出て羽田から最終便で九州へ飛び、火曜日から金曜日まで導入先の農場を回って、豚の観察、お客様からの聞き取り、検査材料の採取などを行い金曜日の最終便で帰るという生活を繰り返しました。  
 「うちはお宅の試験農場ではないよ」と言われながらも、導入試験に応じてくれるお客さんを訪問しては、対策に悩む日々が続きました。  
 最初はグレーサー病とは全く気が付いていませんでした。  
 (次号に続く)



人工保育箱の一例



解剖内臓

その時の写真ではありませんが内臓に肉眼的な病変の無い状態で菌分離が出来ます